



## SF 短編小説

### 「メモリー・アンド・コミュニケーション」

著者：SF プロトタイピングワークショップ参加メンバー  
(NEC とセブン銀行の若手社員)と NEC 開発の LLM

2023年8月、NECとセブン銀行は「SF思考」や「SFプロトタイピング」と呼ばれる「SF」を通して未来の金融を考えるワークショップを実施しました。

ワークショップで作られた未来のストーリーをもとにSF作家の宮本道人氏がSF短編小説を執筆するとともに、NECは生成AI「NECが開発したLLM(Large Language Model: 大規模言語モデル)」を活用したSF短編小説を制作しました。

SF作家の宮本道人氏が執筆したSF小説「ATMに預けられたヒトの話」は[こちら](#)

本イベントの様子を紹介したレポート記事も公開しています。

<https://wisdom.nec.com/ja/feature/digitalfinance/2023121801/index.html>

西暦 2050 年、その時代に生きる男、桐生はまさに 50 歳の誕生日を迎え、その表情には彼の過去が刻まれていた。彼はかつて YouTuber として名を馳せた者だった。彼が若かった頃、YouTube に投稿されるエンタメコンテンツが視聴者たちを熱狂の渦に巻き込む時代があった。しかし、IT 技術の驚異的な進歩と飛躍的な進展により、その時代は静かに幕を引いた。

2050 年の世界では、仮想空間が当たり前の世界になり、脳研究の進化も進んでいる。

朝、目が覚めると、桐生の視線の前にはロボット調の目覚まし時計がピープ音を立てずに、優しく時間を告げている。音声アシスタントのなめらかな声が「おはよう、桐生。今は 7 時です。予定通り脳内アラームを停止しました」と告げる。ベッドを出ると、壁全体が巨大なスクリーンになっていて、今日の天気、ニュースヘッドライン、スケジュールのアップデートなどが表示されている。

朝食の準備は最新の AI キッチンがすでに行い、彼が好む食材がピックアップされ、最適なタイミングで食事が準備されていた。

朝食後、仕事に行くためにリビングルームの特定のコーナーに立つと、ウェアラブルインターフェイスが彼の視線に干渉し、周りの環境を一瞬にしてオフィスの情景へと切り替える。AR(Augmented Reality: 拡張現実)で自宅から一歩も出ずに、世界中の人々と一緒に仕事ができる。

午後、運動をする時間になると、彼のウェアラブルデバイスは彼をトレーニングモードに誘導し、彼の心拍数や筋肉の動き、酸素飽和度などを瞬時に計測し、リアルタイムで彼のパーソナルトレーナーに送信し、フィードバックを与えた。

仮想空間での仕事が終わると、家族と共に VR ゲームを楽しみ、リアルな自然の中でパズルを解いたり、ドラゴンに乗って冒険したり。現実の制約を超えた仮想現実が、生活の一部になっている。これが 2050 年に生きる桐生の日常だ。

人々は自分の心に描いたイメージ、体験したことを、デジタルのキャンバスに描き出す。それは痛みでも喜びでも、刻まれた記憶をそっと振り返るための、新しい時代のリフレインである。その結果、外から語られる物語より、自分の中から湧き出る物語に人々の興味が向かうようになった。他人が創り出したエンターテインメントコンテンツは、見る人を失い、あたかも人里離れた美術館のように静寂を守っていた。

その変化が積み重なるにつれ、桐生たちの日常も変わり始める。昔の記憶という名のノスタルジアが形になることが増え、それが彼らの心を揺さぶる。デジタルな世界は、日常の風景の一部となり、人々は草木や空気と同様に、それと共に息づき、生きている。

桐生たちを取り巻く世界の姿は、近年大きく変化した。IT の進化は、現実世界そのものを精細に再現し、拡張する能力を手に入れ、人々は当たり前のように別世界に没頭するようになった。人びとは、今、新たなステージに立ち、別世界への憧れを現実のものとして享受している。多くの仕事が、IT や AI に置き換わっていった。そのため、瞬く間にして職を失う人々が増え、社会現象にもなった。彼らの存在意義が剥奪された虚無感に多くの人々が打ちひしがれている一方で、なぜかその状況が逆に心地よく感じられ、不思議な安堵感を抱く者もまた少なからずいる、というのがこの世の不思議な現実である。

そんな時代の流れと共に、まさにブームとなっているのが、その独特のシルエットで見た者の心をとらえて離さない「ペット型 ATM」であった。昔よくまちで見かけた ATM が、現金の預け入れや出金をするだけの機械から一変、新たな能力を身につけて現れたのだ。それは何と、使用者の感情を読み取る感情分析機能と、飼い主との対話を可能にする対話機能という、まるでペットとしての役割を担うかのような機能である。

つまり ATM は、記憶を預ける存在、飼い主である利用者とのコミュニケーションが可能な対話のプラットフォームへと進化を遂げたのだ。飼い主が落ち込んだ時ややる気が出ないときには、このペット型 ATM がそれらの感情を理解し、気分転換できるコミュニケーションを提案してくれる。

例えば、子育てで疲れた主婦には、「ちょっとだけ心を休める一時を提供しませんか？」とペット型 ATM は、彼女を見つめて親しみを持って語りかける。「あなたの好きな音楽と映像を用意しましょう。そして、私とのんびりおしゃべりしながら、気持ちをリセットしてみませんか？」ペット型 ATM は飼い主の好きな音楽や動画を再生しリラックスできる環境を作ったり、話し相手になったりすることで気分転換ができるのだ。

そのペット型 ATM の口の中は、イマーシブな体験(没入型の体験)ができるインターフェイスになっていて、自分が行きたい世界、見たい景色にデジタル上で没入体験できるようになっていた。例えば、ファンタジーな動物の世界や、美しい花々が咲き乱れる庭園など、それぞれが自分の大好きな景色の中で過ごすことができる。このペット型 ATM と過ごす時間は、桐生にとってもまた、かけがえのない幸せなものだった。

突如として、桐生の心の奥底で遠い過去が静かに蘇った。彼自身がまだ二十歳の青年だった頃、側に寄り添っていた一人の女性、「美月」の存在。その記憶が彼の心をそっと包み込む。あの時代を振り返ると、少なからず感じていた虚無感も鮮やかに甦る。そう、彼女と共有したかつての日々を、この刹那に再現してみたくなったのだ。彼はひと息吸い込み、ペット型 ATM の内部へと頭を差し出す。そして、かつて美月と二人で歩んだ道のりの風景を投影することにした。

当時、まだ若かった桐生は彼女に素直に打ち明けられなかったことがあった。桐生は運動が苦手で、学生時代の体育の成績はほとんどが悪かったのだ。一方、美月はバスケットボール部のエースで、太陽のように明るく活発な女性だった。桐生は美月にふと自分が「運動が苦手」であること、運動が得意な人にコンプレックスがあることを打ち明けた。すると、彼女も隠していたことがあると言い出した。彼女は、料理が苦手で、包丁や火の扱いに注意が必要なレベルだということ。これまで隠してきたが、偏った食事をとり、不健康に過ごしてしまうこともあったという。二人は、お互いの秘密を共有し、心が軽くなったのを感じた。

ペット型 ATM の中から現実に戻ると、案の定、虚無感が身体を訪れる。だが、それとは対照的に、微かながらも幸福感が鼓動に混じって感じられる。何故だろう。自分でも不思議だったが、とにかく何か安心できる、そんな感覚だった。

桐生は、自分に素直に生きるという決意を胸に秘め、これからの人生に一步踏み出した。彼の目に映る世界は今までよりも鮮やかに、眩しいひかりで満たされていた。